

嗚呼、インドネシア Ah, INDONESIA

第 32 話 トロウラン遺跡群

前文

2007 年 1 月 31 日午前 10 時頃、トラウス大仏を出発して Mojokerto の Trowulan 遺跡博物館に向かった。

遺跡博物館の入り口は南緯 7 度 33 分 35 秒、東経 112 度 22 分 54 秒、標高 44m。

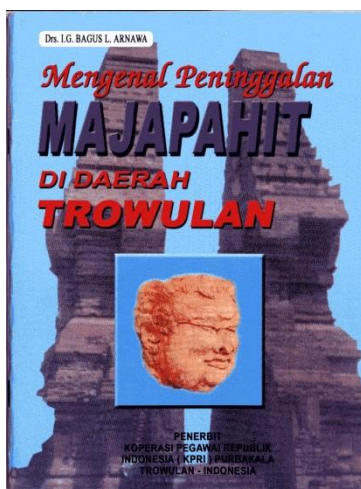
遺跡博物館に着いたのは 11 時頃であった。内部を見学しようとするや博物館の Puspita Agustina というガイドさんが案内してくれた。

彼女はクリスチャンだが、輪廻転生を受け入れていて、友人にも数人同好の士がいるようであった。その一人が数日前に「もうじき日本人が博物館に来るから案内しなさい」と彼女に言ったが彼女は半信半疑であった。ところが突然降って湧いたように日本人である筆者が訪問したものだから、その言葉に驚き遠いカリマンタンにいるその友人に電話をかけたほどであった。

Trowulan には遺跡博物館がある。八十万点の収集物があるが展示場がせまいため部分的にしか展示されていない。吹き抜けの展示場には東ジャワ州各地から収集した神像がたくさん展示されている。これらの神像は元の場所に安置しておくのが現状維持として最適なのだが、周辺のイスラム系住民による破壊が進むので博物館に収納している。

博物館の連絡先は

Musium Archaologi Trowulan
Jl. Mojapahit No. 141-143, Trowulan, Mojokerto
Tel/fax 0321-495515



この博物館には第 23 話でお話したパテジョノトの写真もあったが、寸法や位置が記載されていなかったもので、訪問の翌日データを郵送しておいた。役立てばいいのだが。

これ以降は 2007 年 5 月 17 & 18 日にこの遺跡群を再訪した時の記録も合わせて提示する。

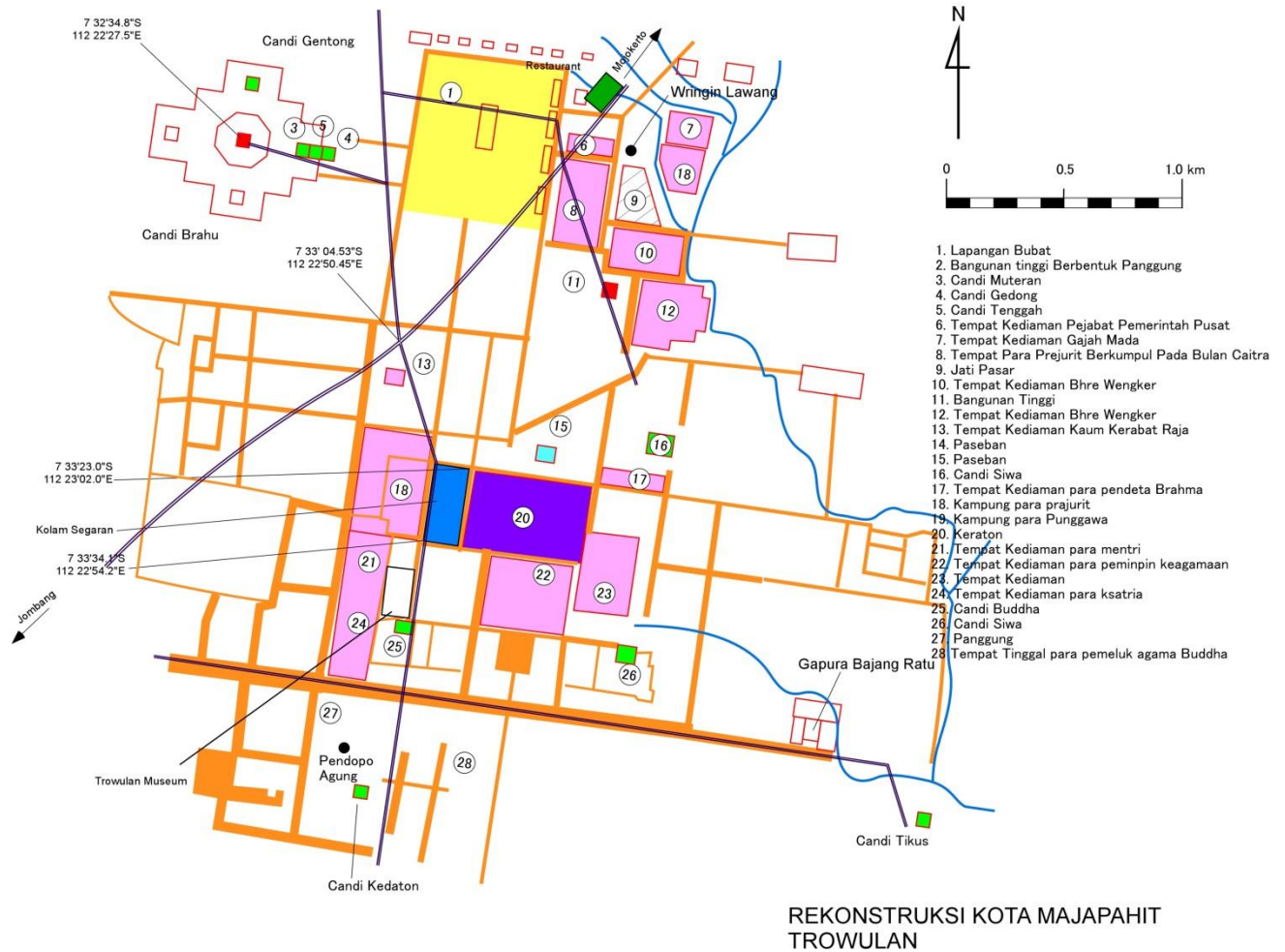
下記のパンフレットを丸のまま訳したら読みにくくなったので、再構成したものである。

目次

1.	マジャパヒト王国について.....	5
2.	博物館の紹介	
2.1	博物館設立までの経緯.....	10
2.2	博物館設立後の歴史.....	11
2.3	保管所の収集物.....	12
2.4	博物館陳列室案内.....	13
2.5	博物館外観.....	13
3.	博物館の提示物	
3.1	アメルタメンターナ.....	15
3.2	ガルーダに乗ったウィシュヌ.....	16
3.3	ビマ神.....	17
3.4	ムナクジンゴ.....	18
3.5	その他.....	19
4.	トロウランの遺跡めぐり（各ページのタイトルの後ろにある数字は緯度と経度を示しています）	
4.1	ウリギンラワン門.....	20
4.2	チャンディ・ブラフ.....	25
4.3	チャンディ・グントン.....	27
4.4	スガラン池.....	28
4.5	バジャン・ラトゥ門.....	29
4.6	チャンディ・ティクス.....	33
4.7	チャンディ・クダトン.....	36
4.8	トゥロロヨ墓地.....	39
4.9	ブレ・カフリパンのヨニ.....	40
4.10	チャンパ姫墓所.....	44
4.11	長い墓地.....	47
4.12	プンドポ・アゲン.....	48
4.13	市場と壁.....	49

同冊子の印刷が劣悪なため写真を転載できないのが残念であるが、モジャパヒト都の図と現在の主要道路、緯度経度は下のとおりである。緯度経度は Google Earth にあわせてある。

Trowulan 遺跡(Majapahit 都址)の地図。平行線で示したのは現在の道路。Trowulan 遺跡博物館に行きやすいように、曲がるべき交差点の緯度経度を掲載した。この地図は 1924 年に作成した図面を基にして何度か修正を行ったものである。



参考 URL

<http://www.eastjava.com/books/majapahit/html/museum.html>
<http://www.ancientworlds.net/aw/Places/Place/418021>
<http://id.wikipedia.org/wiki/Trowulan>
<http://www3.famille.ne.jp/~kazuo/ejava.html>

番号	注釈の説明	筆者の注記
1.	プリアガンの王女が惨殺された場所	ブパット広場 下の註参照のこと
2.	重層構造となっている高い構造物	元図中に番号なし
3.	Muteran 寺院	
4.	Gedong 寺院	
5.	Tengah 寺院	
6.	中央政府交換宿舎	
7.	Gajah Mada 邸	
8.	Caitra 月に集合するための兵舎	Caitra 月とはヒンドゥー暦の 1 月

9.	Jati 市場	なぜ Gajah mada 邸近傍に市場を置いたか不明
10.	Bhre Wengkar 邸	
11.	高層構造物	
12.	Bhre Wengkar 邸	
13.	歴代王家臣住居	
14.	沐浴場	元図中に番号なし
15.	沐浴場	
16.	Siwa 寺院	
17.	Brahma 僧侶宿舎	
18.	兵舎	
19.	部隊長宿舎	
20.	宮廷	
21.	大臣宿舎	
22.	宗教上の指導者宿舎	
23.	住宅地	
24.	武士階級宿舎	
25.	Buddha 寺院	
26.	Siwa 寺院	
27.	舞台	
28.	仏教徒居住区	

註 パラタトンによれば、ラージャサナガラ王はスンダ(プリアガン)の王女と野結婚を望み、スンダ側も同意して王自らが王女を連れてマジャパヒトを訪れることになった。両社は王都に近いブランタス川岸の停泊地ブパットで会談を持ったが、対等な結婚を予想していたスンダ側と、王女をスンダ側からの貢物としてみなすガジャ・マダの見解が対立し、ついに抗争の末、スンダ側は王女を含む全員が殺される惨事となった。1375 年のことであった。(岩波講座「東南アジア史 214 ページ)

この事件が今でもあとを引いていて、西ジャワ州には Gajamada と Hayam Wuruk という名前の通りがないということである。

1. マジャパヒト王国について

序文

約 200 年にわたり栄えたマジャパヒト王朝は各種の考古学的遺物を残している。これらの工芸品は、そのモニュメントであるチャンディや池・沐浴場などの水を使った施設、門などの一体になっているものと、神像、浮き彫り、素焼き製品、陶器、建物の一部など元あった場所から切り離されたものから成り立っている。

マジャパヒト王朝と関連する考古学的地域はこの地域はモジョクルト県トウロウラン郡とソオコ(Sooko)郡にまたがった Trowulan (トウロウラン)に存在し、その広さは 10 x 11 km に達する。

1.1 マジャパヒト王朝史

古代の東ジャワの歴史は三つの期間に分けられる。第一期はクディリ(Kediri)王朝であり、10 世紀から 1222 年までである。第二期はシンガサリ王朝に引き継がれ、1222 年から 1293 年までである。第三期はマジャパヒト王朝による支配の時代であり 1293 年から 16 世紀までつづいた。

マジャパヒト王朝の創始者はウィジャヤ王でありクルタラジャサ・ジャワワルダナ(Kertarajasa Jayawarddana)として初代の王位についた。当初の都はマジャの木がたくさん生えていた地域のトリック(Trik)にあったがゆえにマジャパヒトと呼ばれるようになった。ウィジャヤ王はカラグモト(Kalagemet)を子供にもった。学者によればカラグモトはウィジャヤ王とジャワのスマトラ遠征の際に同行したメラユの女性との間に生まれた息子である。とある碑文ではカラグモトの母はウィジャヤ王の第一王妃と言われている。ウィジャヤ王はその王国を 1293 年から 1309 年まで統治した。

カラグモトは比較的若いときに王位を譲られ、ジャヤネガラ(Jayanegara)王と称した。1309 年から 1328 年までのジャヤネガラ王の統治下では、父王に従ってジャヤカトワン(Jayakatwang)の反乱を鎮圧した人たちや父王とともにマジャパヒト王朝の成立に尽力した人々をジャヤネガラ王が軽視したことから、彼らの不満がつのり、反乱や暴動が相次いだ。遂には同王は 1328 年にタンチャ(Tanca)という名前の王族の医師に殺されてしまった。

ジャヤネガラ王の死後、治安維持のために、シンガサリのクルタネガラ王の王女であるパトゥニ王がウィジャヤ王の妃、ジャヤネガラ王の継母となった。宰相ガジャマダ(Gajah Mada)とともに、パトゥニはマジャパヒト王国の権威を取り戻すことに成功した。パトゥニ王が退位し僧籍にはいった後、依然として政治はパトゥニ王の支配下にはあったものの、王位はその王女であるトリブアナ・ウィジャヨトウンゴ・デウィ(Tribhuana Wijayatunggo Dewi)あるいはブレカフリパン(Bhrekahuripan)に継承された。

宰相ガジャマダの援助を得たトリブアナ(Tribhuana)は、その統治の間にマジャパヒトをインドネシアの列島のみならず外国にまで知られるような大国に育て上げた。トリブアナの治世は同王が没した 1350 年に幕を閉じ、その後は王子であるハヤムウルク(Hayamwuruk)が王座についた。

マジャパヒトは、ガジヤマダが没した 1365 年までハヤムウルクの治世で黄金期に達した。ハヤムウルクが没した 1389 年以降は兄弟の間の紛争で王国は揺れてしまった。

ハヤムウルクに交代したのは、ウィクラマワルダツナ(Wikramawarddana)と結婚したクスマワルダツニの娘であった。一方、ハヤムウルクの妾腹の子であるウィラブミ(Wirabhumi)は王位継承を強く要求した。この問題を解決するためにマジャパヒトはその王国を二つに分割し、東半分をウィクラマワルダツナに、西半分をクスマワルダツニとウィクラマワルダツナの統治地域とした。その後もこの両王国間における軋轢は続き、パラグレグ(Paragreg)の悲劇という名で知られている兄弟戦争が、1403 年から 1406 年まで続いた。最終的にはウィクラマワルダツナ派が勝利し、ウィラブミは一旦は捕まったものの逃走した。その後、王国はウィクラマワルダツナによって再統一がなされ、ウィクラマワルダツナは 1429 年まで王国を統治した。

ウィクラマワルダツナはスヒタ(Suhita)王女に王位を継承し、同王は 1429 年から 1447 年まで統治させた。スヒタは妾腹の第二子であった。スヒタの母親は多分ウィラブミの王女であったと思われる。スヒタの王位継承で将来発生する問題の芽を事前に摘んでしまうことを希望していたようである。スヒタ王が 1447 年に没したあとクルタウィジャヤ(Kertawijaya)が王位を継承した。クルタジャヤウィジャヤもウィクラマワルダツナの王子であるとともにスヒタ王の腹違いの兄弟であり、王位は 1451 年までと短命であった。

クルタジャヤウィジャヤ王の後にはブレパモタン(Bhre Pamotan)がスリ・ラジャ・サワルダツナ(Sri Raja Sawarddana)として王位を継承し、カフリパン(Kahuripan)に王都を定めた。同王の統治は 1453 年に没するまでの短期間であった。同王の没後の三年間マジャパヒトは空位期間となった。歴代のマジャパヒト王族間の対立の影響によってその統治力は王都のみならず地方でも弱まった。

1456 年になって、ブレウアンクル(Bhre Wengker)がマジャパヒトの統治を始めることになった。同王はクルタウィジャヤ王の息子であったが、1466 年に没し、ブレ・シンハウィクラマワルダツナ(Singhawikramawarddana)として即位したブレパندانサラス(Bhre Pandan Salas)が継承した。1468 年になってクルタブミがマジャパヒト王の権利を主張した。クルタブミはトウマペルを支配していたが、シンハウィクラマワルダツナはダハ(Daha=クディリ地方の地名)へ退いたにもかかわらず直接統治を続けた。

シンハウィクラマワルダツナはラナ・ウィジャヤ(Rana Wijaya)王子があり、この王子がダハで行っていた父王に代わり 1447 年から 1519 年まで統治した。1478 年に同王子はクルタブミ(Kertabumi)への報復戦争に勝利し、兄弟戦争でばらばらになっていたマジャパヒト王国を再統一した。ラナ・ウィジャヤはグリンドラワルダツナとして即位した。

それにもかかわらず、マジャパヒトの権威を脅かしていたジャワ島北岸地域の発展により内部から崩壊していたマジャパヒトはついには存続を続けることができなくなってしまった。

1.2 マジャパヒト時代の経済

農業がマジャパヒト王国の収入源のひとつであった。それゆえ、王国は農業に多大な注意を払っていた。マジャパヒト自体に建設された二つの構造物、すなわちジウ(Jiu)とトウライロヤプリ(Trailoyapuri)ダムである。

ジウダムはkalamasaの天水田であった地域に灌漑を行い、トゥライロヤプリダムは下流域(Prasasti Jiu)に灌漑を行っていた。

サルトノ・カルトディルジョ氏によれば、マジャパヒト王国は、マジャパヒトの社会経済は農業に依存しているだけではなく特にジャワ島北海岸にの諸都市における商業にも依存している半商業的農業国であったとのである。マジャパヒト内で重要ないくつかの港湾都市とはチャング(Canggu)、グレシック(Gresik)、シダユ(Sidhayu)、トゥバン(Tuban)、スラバヤ(Surabaya)、パスルアン(Pasuruan)であった。これらの港湾都市にはアラブ、ペルシャ、グジャラート(インドの古名)、中国、マラッカとも双方向の通商があった都市があった。

マジャパヒト時代に通用した通貨は何種類があり、それらはウアン・ゴボク(Uang Gobog)、ウアン・クペン(Uang Kepeng=中国通貨)、ウアン・マ(Uang Ma)がある。マジャパヒト時代の貿易品目は、三種類に分けられる。ひとつは日常生活物資、二つ目は工業分野での製品、三つ目は島嶼産品であった。商業はマジャパヒトでは極めて重要な経済活動のひとつを構成していた。余剰農産物は生活物資としての交易物となっていた。

1.3 マジャパヒト時代の芸術

マジャパヒト時代にはカカウインと呼ばれる詩による文学が盛んであり、ムプ・プラパンチャ(Mpu Prapanca)作の「ヌガラクルタガマ(Negarakertagama)」、ムプ・タントウラール(Mpu Tantular)作の「アルジュナウィジャヤとダルマカタナ(Kunjarakarna dan Dharmakatana)」、ムプ・タナクン(Mpu Tanakung)、クンジャラカルナ(Kunjarakarna)共著の「ルブダーカ(Lubdhaka)」「ウルツタサンチャヤ(Wrttasancaya)」「バハナ・スカール(Bahana Sekar)」、ムプ・ドウスン(Mpu Dusun)作の「ダルマカタナ(Dharmakatana)」などがある。その他には歌のような新しい文学が登場した。この歌には、「ウィジャヤカルマ歌(Kidung Wijayakrama)」「ハルシャウィジャヤ歌(Kidung Harsyawijaya)」「ソランダカ歌(Kidung Sorandaka)」などがある。

文学以外では、当時の家屋は外見がよいためにヌガラクルタガマのププ(pupuh)9にあるように建築美術が栄えた。ヌガラクルタガマのププ9には家屋の美しさに関してこんな詩がある。

全ての家は柱が強く

美しい彫刻が施され、美しく塗装されている。

.....

屋根瓦は輝き

ことごとく目にしみいる

心が惹かれる。

マジャパヒト王国の遺跡であると信じられているトロウランでは、素焼きでできた異物が発見されている。遺物には人の像、動物の像、建物のミニチュール、レンガ、井戸枠、土管、瓦、棟瓦、柱頭の覆い、花瓶、kemuncuk、器、神像の鋳型、水がめなどさまざまなものがある。

1.4. マジャパヒト時代の宗教

「多様性の中の統一(Bhineka Tunggal Ika)」という標語はタントラール作の「スタソマ(Sutasoma)」というマジャパヒト時代の本から採用したものである。この標語の元々は「BHINEKA TUNGGAL IKA TAN HANA DHARMA MANGRWA」であり、「外見は異なれど同一。両面をもつ真実は存在しない」という意味である。

この文章は当時の宗教による生活規範を示したものである。というのは当時はヒンドゥー教にしろ仏教にしろ共存していたからである。この記載は宗教上の指導者が、仏教もヒンドゥーも公平に扱われていたことを証明するものである。イスラム教は既にマジャパヒトの黄金時代に存在していた。モジョクルト県トロウラン郡セントノレジョ村のトロロヨ(Troloyo)墓地にある墓石の先端は丸く、ハスとマジャパヒトの象徴の太陽模様で飾られていて、古代ジャワ文字の年号が入っているのみならず、他の表面にはアラビア語の数字が記されている。この墓石はマジャパヒト時代にはすでにイスラム教がはいっていた証拠である。

1.5. マジャパヒト時代の法規

庶民の生活をコントロールするために、マジャパヒト王国は、宗教と呼ばれる法規書にまとめられた法律をもっていた。この法規書には刑法と民法も含まれていた。

この書類において国民各人に有効な法規は宗教第六項にみられる。王の奴隷(高級官僚)といえども、一回でも虚言を吐いたり暴力行為をおこなうなど、秩序を乱したものは死刑に処す。

これ以外にもマジャパヒト法典 259 と 261 項にはこうある。水田を放置したり、施設や家畜の世話を怠った場合は罰金の対象とするか、窃盗犯として死刑とする。

これは農業の振興や家畜の飼育は大衆と国家の経済に大きな影響をもたらすということを知っていたハヤムウルク王に影響されているのである。農業と牧畜業以外にはマジャパヒト王国の収入は有形の王への税金と任意の貢物であり、義務的な納税と貢物の量は王への忠誠を示す無形のしるしとなった。

1.6 マジャパヒト時代の政治制度

大国として、マジャパヒト王国は独自に正規の政府軍を保有していた。王は行政官として多数の官吏を抱えていた。マジャパヒト王国政府のヒエラルキーはつぎのとおりであった。

- (1) 王 (Raja) 王国を指導する最高権力を持つ者
- (2) ユワラジャ/クマララジャ (Yuwaraja/Kumararaja) 王子と王女

- (3) ラキャン・マハマントリ・カトリニ(Rakyan Mahamantri Katrini) 王国の政治を行う官吏
- (4) ラキャン・マハマントリ・リ・パキランキラン(Rakyan Mahamantri ri Pakiran-kiran) 官吏
- (5) ダルマヒャクサ(Dharmadhyaksa) 宗教分野の議長
- (6) ダルモパパティ(Dharmopapati) 寺院の維持管理や祭祀の実施、霊魂に関する宗教担当者

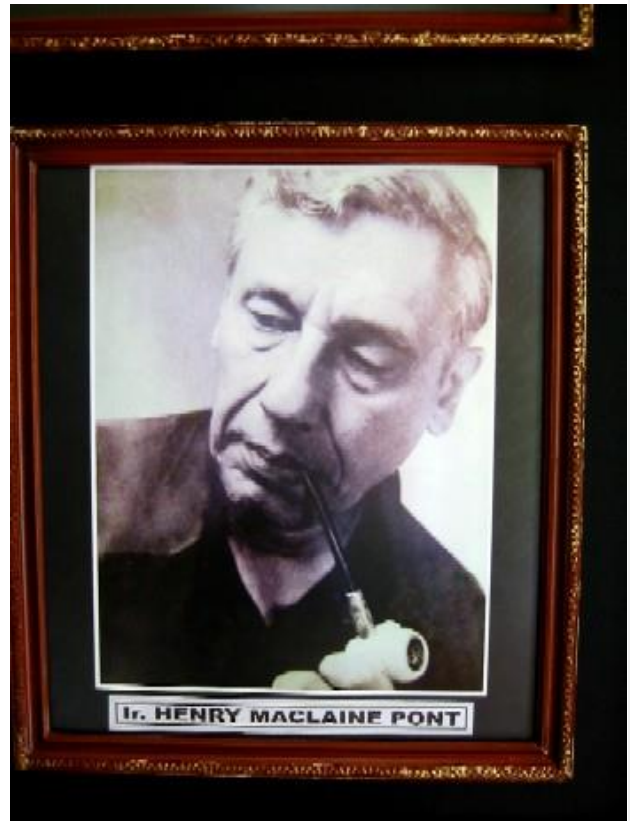
2. 博物館の紹介

2.1 博物館設立までの経緯

多数の熱心な専門家がトゥロウラン地域の遺跡調査を行った。トゥロウラン地区の最初の調査結果は1815年にWardenaarによるものであった。彼はラッフルズ卿（Raffles = 英国シンガポール総督）からモジョクルト地域遺跡保存の仕事を与えられ、その成果は二冊の“History of Java”（1817）にまとめられた。この報告書ではトゥロウラン遺跡はマジャパヒト王朝のものであることを述べている。Wardenaarに続き、W.R. Van Hovell（1849）とJ.F.G. Brumund（1854）、Jonnathan Riggが調査を行い、彼らの調査結果は“Joumal of The Indian Archipelago and Eastern Asia”に掲載された。その中でJ. Hagemanは“Toelichting over den ouden Pilaar van Majapahit”（1858）という題でトゥロウランとの関係を述べている。R.D.M. Verbeekは1887年にトゥロウランを訪れていて、TBG, XXXIH,（1889）に“Oudheden van Majapahit in 1815 en 1887”という記事を発表している。その後インドネシア人であるモジョクルト県・県令のA.A. Kromodjojo Adinegoro（1849-1916）はトゥロウランの遺跡保護に大変熱心であり1914年にはCandi Tikusを発見している。同氏はさらにマジャパヒトの考古学的遺物の収集のためのモジョクルト博物館を創設した。“Comissie voor Oudheidkundige Orderzoek op Java en Madura”の一員であったJ. Knebelは1907年にトゥロウランの遺跡の遺物目録作成を行った。続いて、N.J. Kroomは、金字塔ともいえる“Inleiding tot de Hindoe-Javansche Kunst”（1923）に述べた特殊な方法でマジャパヒト遺跡について解説したのである。



A.A. Kromodjojo Adiegoro



Henry Maclaine Pont

トロウランの調査は 1924 年に Oudheidkundige Vereeniging Majapahit が設立されてからはより熱心におこなわれることになった。1925 年には、トロウラン遺跡に深い興味を抱いた技師の Henri Maclaine Pont がトロウラン遺跡博物館と遺跡発掘事務所を設立した。同氏は 1921 年から 24 年にかけてトロウラン遺跡の発掘を行い、その調査結果を Nagarakrtagama に記載されている事項と照合しトロウランのマジャパヒトの都の復元図を作成したのであった。

Henri Maclaine Pont に続いたのは 1948 年発行の VKI, VII “De Kraton Van Majapahit” の著者である W.F Stutterheim であった。同氏は Nagarakrtagama の記載事項と Yogyakarta と Surakarta の宮殿の建築様式や装飾に関してはバリの寺院のものとを比べながらマジャパヒト王宮の再建に努力した。マジャパヒト寺院の再建は、Nagarakrtagama の記載事項を基本として TH. G. TH. Pigeaud の手によっても行われた。そのスケッチは “Java in en the 14th Century : A Study in Cultural History”, 5 jilid (1960 – 1962) に添付されている。独立後は 1953 年以降インドネシア共和国考古局のトロウラン分室が担当した。最近でもトロウランの調査は遺産建造物の修復・保存も伴い熱意をもって続行されている。国立考古学研究センターは 1970 年以來現在まで発掘を続行している。発掘調査はガジャマダ大学の考古学教室、インドネシア大学の考古学教室が手がけたこともあり、1987 年以來毎年計画的に行っている発掘調査を通じてトロウランは考古学者の卵の教育の場ともなっている。1983 年以降現在まで東ジャワの遺跡保存事務所の協力の元、これら遺跡の修復・保存の努力は史跡遺跡保護局が行っている。

多数の考古学者とインドネシア歴史研究家によるトロウランに関する研究は、マジャパヒト時代における比較的大規模に都市がこの地域に以前に建設されたことがあることを信じさせることになった。多種多様な考古学的遺物の中でも各種の記念となる建築物が再建された。しかしながら、早急に保護・保存を待ち望んでいる考古学的遺物がまだまだたくさん存在する。

2.2 博物館設立後の歴史

以前にはトロウラン遺跡博物館としばしば呼ばれていた、東ジャワ史跡遺跡保護局運営による神像保護事務所は約モジョクルト市南西 12km に位置するトロウラン県に位置している。トロウラン地域はマジャパヒト遺跡で有名であり、それゆえ同時代以降の大量の考古学的遺物を神像保護事務所が管理している。上記の遺物は事実上住民による発見のみならず発掘を通じて入手されている。当初トロウラン遺跡博物館は Kanjeng Adipati Ario Kromojoyo Adinegoro と Ir. Henri Maclaine Pont が 1924 年に設立した “Oudheidkundige Vereeniging Majapahit” (OVM) の調査結果による遺物の集積のために利用された。マジャパヒト王宮遺跡の調査をより積極的に行うために、当初ジャカルタに住んでいた Maclaine Pont はトロウランに引越し、モジョアグン製糖工場から借りた家に住んだ。この家屋と土地はトロウラン遺跡博物館になっている。その後、トロウランのマジャパヒトの都の調査はさらに速やかに進んだ。1926 年からこの博物館は一般公開された。

1942 年に日本軍が占領した際、Maclaine Pont は捕虜になった。その一年後にジャカルタのあった遺物事務所の萱嶋教授の命令でこの博物館は再開された。Maclaine Pont 個人所有物はオークションにかけられたとともに残念ながら博物館の収集物の一部も売却されてしまった。それ以降、1963 年にモジョクルト考

古事務所が開設されるまで、博物館の運営母体は転々と変わった。モジョクルト考古事務所の管理下で博物館は発展を遂げた。名称はしばしば変わったが、博物館の管理運営は齟齬をきたさず、その後 1979 年に同事務所は東ジャワ史跡遺跡保護局に昇格しその時東ジャワ遺跡保護事務所ができたのであった。

年を追うに従い、トロウラン地区やそれ以外の地区からの集められた遺物は増加し、ついに 1987 年にはトロウラン遺跡博物館は、元の位置から南へ約 2km の地点に建設された建物に移転することになった。この新しい建物は神像保護事務所と呼ばれ、旧博物館は東ジャワ遺跡保護事務所として使われている。

2.3 保管所の蒐集物

保管所の蒐集物は、最多数はトロウラン地域からではあるが、東ジャワの各地から集められた神像である。神像の形状と材料から蒐集された工芸品は以下のように分類されている。

- (1) テラコッタ(素焼)、白い石、安山岩製のレリーフと神像
- (2) 鋳型や碾き臼、漁労用の道具などの生産あるいは工芸用の道具
- (3) 台所用品や装飾品、家屋の調度品やその他素焼や青銅、鉄、銀、金製品などの生活用品
- (4) 祭器
- (5) 武器
- (6) 碑文
- (7) 古銭
- (8) 磁器など

このような大量の蒐集物の中で最も支配的なものは素焼きの神像である。形状分析によるとトロウランからの発掘物は二種類に分類される。

- (1) 器の形状を持ったもの: 鉢、素焼きのコメの蒸し器、中型の水がめ、大型の蒸し釜、小型の壺、素焼きの鋳型、サンバルを作る擦りおろし用の石皿、お椀、皿、水差し、土鍋、小瓶、急須、中華なべ、四角の器
- (2) 器の形状をしていないもの: 鍋敷き石、直径 1m 高さ約 50cm の井戸枠、ランプ、建物の模型、水路よう壁、鬼瓦、瓦、峰瓦、投網の錘、グヌガン(ワヤンクリットの)、神像、おもちゃなど。

上記の素焼き製遺物にはその種類と数量において特徴がみられるため、トロウラン神像保護事務所では素焼き製遺物のみを集めた特別室を設けてある。

神像保護事務所は十分に広い 57,625m² の敷地を有するとともに、遺跡の発掘品を展示している。この地域はマジャパヒト時代から居住地区とされていて、建物の横にそれが見られる。博物館の建物は二階建ての本館とあずま屋ふうの吹き抜け構造になっている平屋の四棟から構成されている。博物館への見学者がこれらの陳列品を理解しやすいように、蒐集物の付近に英語とインドネシア語で説明したカードを置いている。その他には、博物館職員が常時待機していて見学者の質問に答えられるようになっている。

2.4 博物館陳列室案内

2.4.1 神像保護事務所展示室(博物館)本館

一階 展示室 A 発掘された各種の素焼製品を展示

一階 展示室 B (非公開) 各種の粘土及び石製品を展示

二階 展示室 A 各種の鉄、青銅、銀製の武器、祭器、古銭、板碑を展示

二階 展示室 B 青銅および鉄製の馬具や牛につける鈴などと家具などを展示

二階 展示室 C 鉄及び青銅、銀、黄銅製の家庭用品、装飾品、楽器を展示

2.4.2 吹き抜けの展示室

吹き抜けの展示室に展示されている蒐集物は安山岩、硬質の白色石灰岩、粘土製の各種の神像、レリーフ、板碑、花瓶、井戸枠、家の模型、水浴用水ため桶、六角のレンガなど。

蒐集物の詳細は次の章に詳しく述べる。

2.5 博物館の外観



左側に見える二階建てが本館で、右側の吹き抜けの建物が展示室になっている。

博物館の入場券はこちら。これは 2007-01-31 に訪問した時のもので、今回 5 月 18 日は開館前に横の入り口から入ってしまったため、入館料を踏み倒してしまった。

今回の訪問のときには、いろいろな質問に対し館長のアリスさんに直接答えていただけたのが幸いであった。



入場券



心無い人たちの破壊行為の結果

3. 博物館のコレクション

3.1 アメルタメンターナ Amertamentana

発見場所	マラン県アンペルガディン郡タマンサトリアン村 Ds. Tamansatrian, kec. Ampelgading, kab. Malang.
材質	硬質白色石灰岩(Tufa)
寸法	高 = 250 cm, 幅 = 52 cm, 奥行き = 75 cm
時代	マジャパヒト
発見年	1969

この寺院のミニチュールは、命の水を探すヒンドゥーの物語であるアメルタメンターナあるいはサモドゥラメンターナが浮き彫りされている。アメルタメンターナの物語はアディパルワの中の一つの物語であるマハバラータ神話第一部から取られたものである。普通は濠などで囲まれた真ん中に置かれるものであるこのミニチュールの塔にはこの物語が刻まれている。この位置はアメルタメンターナをそれ自身で象徴しているのである。





アメルタとは神々の飲み物であり、永遠を象徴している。というのはこれを飲んだ人は誰でも死から逃れることができ、のみならず蘇生できるからである。アメルタは海を攪拌することでできるものである。海を攪拌する道具はマンダラ山である。一番下はウイシュヌ神の化身である亀で、バスキ神は蛇に化身してこの山に巻きついている。その尾は神々に頭部は阿修羅たちにつかまれている。神々と阿修羅たちはかわるがわる蛇の尾と頭を引っ張り、マンダラ山を回している。その少し後に次々と海から出てきたのは、まず天国の歓喜の女神、ウイシュヌの妻である幸福の女神ラクスミ(Laksmi)、白い天馬ウチャイスルラヤ(Ucaisraya)、光り輝く宝石のカウツツバ(Kaustusbha)、豊穡の木パリジャタ(Parijata)、最後はアメルタを入れた水差しを持つ医術の女神ダアンワンタリ(Dhanwantari)だ。マンダラ山は神々が鎮座している場所とされるのみならず世界の象徴と解釈されているジャワ島のマハメル(Mahameru)山としばしば同一視される。このようにして、命の源であるアメルタを製造するために神々が働いているとこの物語は伝えている。

3.2 ガルーダに乗ったウイシュヌ Wisnu naik Garuda

発見場所	パスルアン県グンポル郡ワナソニヤ村のブラハン寺院 Candi Belahan di Ds. Wanasonya, Kec Gempol. Kab. Pasuruan.
材質	安山岩
寸法	高さ = 170 cm, 幅 = 53 cm, 奥行き = 30 cm
時代	クディリ
発見年	記載なし

このウィシュヌ神像はアイルランガ王をガルーダを操るウィシュヌ神に具現化したものである。この神像はモジョクルト神像倉庫に保管されていたが 1991 年にこの博物館に移動されたものである。アイルランガ王が王国をジャンガラ(Janggala)とパンジャル(Panjalu)に分割した後、同王は頭を丸めレシ・グンタユ(Resi Gentayu)と改名し修道僧となった。存命中アイルランガ王は王国の繁栄とダルマワンサ・トグウ治世下に起きたヲラワリ(Worawari)王の攻撃による治安の不安定に混乱した国民の安定に貢献した。その経緯によりアイルランガ王が亡くなったときに、世界の平和維持を行う守護神で擬人法的に描かれた怪鳥ガルーダを操るウィシュヌ神に祭り上げられたものである。ウィシュヌ神の乗り物として以外に、ガルーダも解放の象徴とされクディリ王朝(Garudamukha)の象徴になった。聖像学においてガルーダは翼を広げ 2 ないし 4 本の腕をもつ人間の体をもつ大鷲として表現されている。

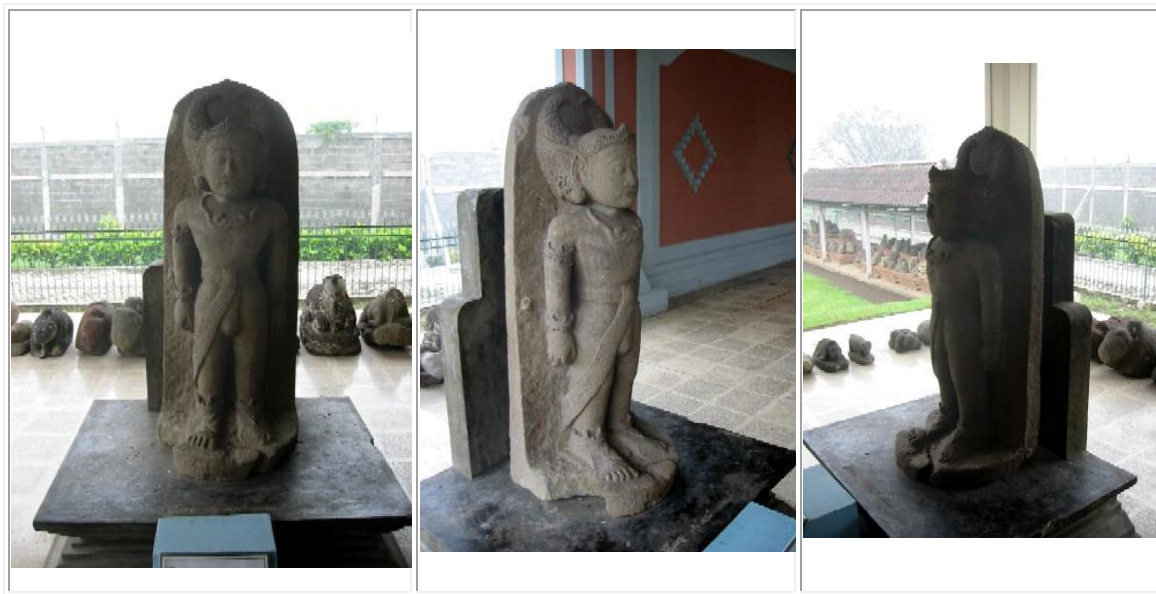
二本の腕は伸縮するように、残りの二本の腕は傘と水差しを持ち片足は蛇を踏みつけている。このデッサンはマハバラータの Parwa I にあるガルーデヤの物語にしたがっている。アイルランガ王は 1048 年に没し、プナングガン(Penanggunan)山麓にある寺院群があるティルタ(Tirtha) - Belahan 村に埋葬された。



3.3 ビマ神 Bima

発見場所	プロボリングゴ県アンドウンビル郡ティリリス村 Desa Tirils, Kecamatan Andungbiru. Kabupaten Probolinggo
材質	安山岩
寸法	高さ = 133 cm, 幅 = 49 cm, 奥行き = 48,5 cm
時代	マジャパヒト
発見年	記載なし

ビマ神はプンダワの五人兄弟のうちの二人目の男子である。このビマ神はワヤンの中でティルタパウィタンディ(Tirta Pawitandi)あるいはルチ神を招来するための象徴である聖水を大変な困難の後に作ることに成功したものである。その力の強さと超自然能力により、15 世紀はじめまで続いたマジャパヒト王朝の成功の最期にはジャワではビマ神に対する崇敬が高まったのである。



3.4 ムナクジンゴ Menakjinggo

発見場所	モジョクルト県 トウロウラン村 字ウンガウガハン ムナクジンゴ寺院 Candi Menakjinggo di Dukuh Unggah Unggahan, Ds. Trowulan, Kab. Mojokerto.
材質	安山岩
寸法	高さ = 143 cm, 幅 = 47 cm, 奥行き = 38cm
時代	マジャパヒト
発見年	記載なし

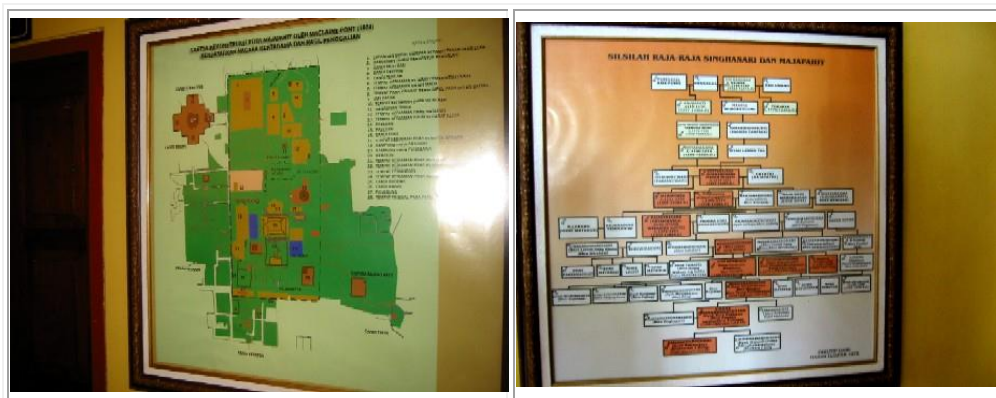
この神像はモジョクルト神像倉庫に保管されていたが 1991 年にこの博物館に移動されたものである。この神像が発見された地区の住民によると、ムナクジンゴと言う名で呼ばれていた。オランダの記録では次の特徴からこの神像はマハカラ(Mahakala)あるいはバヒ・ラワ(Bahi Rawa)と呼ばれている。

巨人のような容貌をし、目は大きく開かれ、蛇と右腕はナイフをつかんでいる。しかし、オランダの記録には記載されていないほかの特徴から、このムナクジンゴ神像は、翼を持つこと、拍車をつけた足、以前は嘴を形どっていたと思われる破損した口の部分からガルーダを形どったものとも疑われる。



3.5 その他

2007 年1月 31 日に訪問したときと、以下の地図と王族の系図が書きかえられていた。



Maja の木

4. トウロウランの遺跡めぐり

4.1 ウリギンラワン門 Gapura Wringin Lawang S7 32'31.8" E112 23'28.1"

ウリギンラワン門はモジョクルトージョンバン街道の 11km 地点から南に約 200m にあり、行政区画ではモジョクルト県、トウロウラン郡、ジャティパサル村、字ウリギンラワンに位置する。

この古い建物は、1815 年以來ラッフルズの報告書でジャティパサル門(gapura Jati Paser)と呼ばれ知られていた。1907 年のネベル(Knebel)の報告書ではウリギンラワン門(Gapura Wringin Lawang)と言う名で紹介されている。時々この門は「寺院」と呼ばれることがある。この建物はすべて赤レンガで造られ、東西を向いている。基礎部分は 13 X 11.5m の四角形をなしている。復元作業前には、北の部分が 9m しかなかったのに対して南の部分がまだ健在でありその高さは 15.5m あった。ウリギンラワン門の復元作業は 1991 年に開始され 1995 年に終わった。

この構造物はブントール(bentar)寺院形式で、すなわち屋根を持っていない。bentar 寺院は普通寺院群や他の建物群の入口の門として機能する。この形状からウリギンラワン門は bentar 寺院の機能と同じ機能を持っていることは明確である。一般的に人はマジャパヒトの王都に入る門として結び付けているが、実際のところ、この門は宮殿かあるいは他の建物に入る門として建てられたのか今でも確かに分かっておらず、ただマジャパヒトの王都にあったひとつの建物群にはいる門であると考えられている。

この構造物はブントール(bentar)寺院形式で、すなわち屋根を持っていない。bentar 寺院は普通寺院群や他の建物群の入口の門として機能する。この形状からウリギンラワン門は bentar 寺院の機能と同じ機能を持っていることは明確である。一般的に人はマジャパヒトの王都に入る門として結び付けているが、実際のところ、この門は宮殿かあるいは他の建物に入る門として建てられたのか今でも確かに分かっておらず、ただマジャパヒトの王都にあったひとつの建物群にはいる門であると考えられている。



正門から



南西から見る



1990 年当時の修復前の状態



修復工事中



レンガの修復



1995 年の修復終了時



修復前の状態



レンガの積み立て



工事中の状態



修復後の状態



レンガの取り外し

筆者註

マジャパヒトの都には四つの門があり、北東にはこのウリギンラワン門、南東はバジャン・ラトゥ門、南西はチャンディ・クダトン、北西にはチャンディ・ブラフであると、バジャン・ラトゥー門のガイドが話していた。

この門は国道ジョンバン・モジョクルト街道からすぐに見える場所にある。

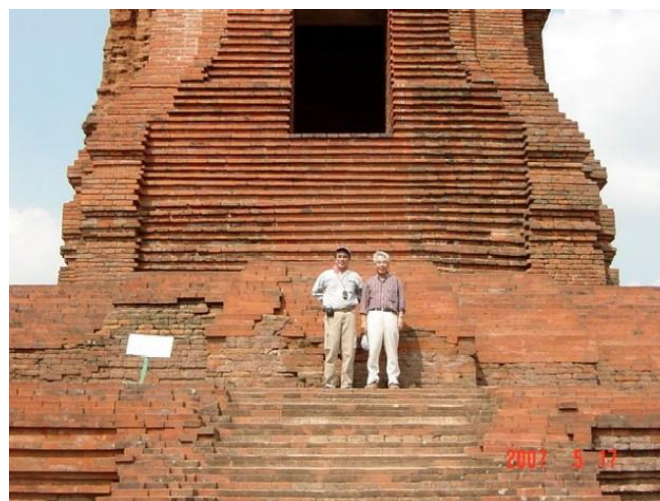
モジョクルトから来てこの門に入る直前右手にあるパダンレストランがこのあたりではお勧めである。特にイカのココナツソース煮が美味しいのである。四人で食べて約 12 万ルピアだからかなり高い部類に属する。

4.2 チャンディ・ブラフ Candi Brahu S7 32'34.8" E112 22'28"

ブラフ寺院は、行政区画ではモジョクルト県、トゥロウラン郡、ブジジョン村、字ジャンブ・メンテに位置する。モジョクルト-ジョンバン街道に面した東ジャワ歴史考古遺跡保存事務所の前から北に 1.8km である。トゥロウランにおける遺跡の構造物に主に見られるように、ブラフ寺院もレンガで構築されていて、西に向いている。平面は 18m と 22.5m の長方形をなし、残存する構造物の高さは 20m である。

この建物は垂直方向で見ると三段になっている。脚にあたる部分は最下部で小さな部屋とテラスまでの構造物で構成されている。脚の部分の上部にある胴体にあたる部分は小さな部屋を覆うとともに屋根の下梁となっている。屋根部分は建物の最上部にあり小さな部屋をふさぐ形となっている。ブラフ寺院周辺に関する以前の報告によると、ムトウラン寺院(Muteran)や グドン(Gedong) 寺院, トウンガ(Tengah) 寺院、グントン(Gentong) 寺院など、現在では崩壊してしまった他にもいくつかの寺院が存在したとのことである。これら寺院群の周囲には、仏教風の合金製の古い祭器以外にも金製の装身具や金属製の神像も発見されている。建造物の形状と寺院の東南の屋上に置かれた残存するストーパーの一部から、ブラフ寺院は仏教寺院であり、15 世紀に建設されたものと推定される。

ブラフ寺院の歴史はトゥロウラン付近にある寺院群より古いとする意見もある。ブラフの名前は、ブラフ寺院の約 45m 西で発見された銅製の碑文であるアラサンタン(Alasantan)の中で述べられている聖なる場所、ワナル(Wanaru)あるいはワラフ(Warahu)という単語と関係がある。この碑文はムプ・スドック(Mpu Sendok)がサカ暦 861 年(西暦 939 年 9 月 9 日)に作成したものである。調査中には灰や遺骸は一度も見つからなかったが、民間に伝わる伝承では、この寺院はブラウジャヤの暦王の遺体を荼毘にふした場所として機能したと言われている。この寺院の小部屋は現在空っぽである。ブラフ寺院は 1990 年から 1995 年にかけて復元作業が行われた。



筆者註

歴代の王の遺灰を納めるチャンディであり、Trowulan 遺跡群では最大のもの。このあたりは解像度が良いので Google Earth でもはっきりとこのチャンディが確認できる。

チャンディから見てその参道の方角は西から北へ 35 度に向いていた。

この近くにもモジャパヒト時代のいろいろな遺跡があるが、現地住民たちが農地として使うために破壊が進んでいる。

Trowulan 遺跡を見学して不思議だったのは、このような恒久的な構造物を構築するのになぜ耐久性の低いレンガ batu batah を使用したのかということであった。恒久的な構造物を作るのなら、ボロブドゥールなどの寺院に見られるように、レンガではなく強度が安定していて加工しやすい安山岩を利用するのが技術的に正しいと思う。

しかし、栄華を誇ったマジャパヒト王朝にも関わらず耐久性の低いレンガを使ったのはなぜだろう。レンガに使用する粘土は遺跡の近くを流れるブランタス川が大量に供給したことだろう。構造物に使われているレンガの焼結温度は、現在のレンガの硬度から推測してみると稲の茎を焼いて得られる温度である 800 度である。

これ以上の温度を得る技術がこの当時なかったのは、素焼きのテラコッタ製品が大量に出土することは釉薬の技術がなかったことと、1000 度以上を焼結に必要とする陶器はすべて中国製であったことから明白である。この根拠は[こちら](#)をご覧ください。

製陶技術が低いにもかかわらず、耐久性の低いレンガをあえて使ったのは、レンガがその当時としては最新鋭の技術の成果であり、それを誇るためだったのかもしれない。

あるいは Majapahit 王朝は、安山岩が採掘される山岳部を平定していなかったため材料の入手が困難であった可能性がレンガを多用した理由として推測される。

4.3 チャンディ・グントン Candi Gentong

グントン寺院はブラフ寺院の東側 350m にあり、行政区画ではモジョクルト県、トゥロウラン郡、ブジジョン村、字ジャンブ・メンテに位置する。

グントン寺院が発見された初期にはただの土の塊であった。1994 年から 1998 年に詳細な発掘調査が行われた。覆われていた土をすべて取り除いた後、その構造物は寺院建築物の基礎部分であることが分かった。平面的には西を向いた山門で正方形をなしていた。

この建物は平面的には 23.5m x 23.5m であり、高さは 2.45m であった。この発掘調査中に数々の異物が発見された。遺物には元と明時代の中国産磁器のかけらや陶器の一部、中国の通貨、金製品、ストゥーパ、仏像などがあつた。構造物の形状とストゥーパと仏像から見ると、グントン寺院は仏教寺院で、14 世紀に建立されたものであると推定される。

筆者註

近隣住民が遺跡のレンガを持ち出して、それを粉砕してレンガを作るために再利用している。現在では柵で周りを囲み、屋根で覆って降雨による侵食を防止している

4.4 スガラン池 Kolam Segaran S7 33'34.1" E112 22'54.2" at Southwest corner

スガラン池は行政区画ではモジョクルト県、トゥロウラン郡、トゥロウラン村、字トゥロウランに位置する。モジョクルト-ジョンバン街道のトゥロウランーブンドポアゲン街道の交差点から南に約 200m の位置である。

この池を発見したのは 1926 年にマクライン・ポント(Maclain Pont)であった。当初は貯水池は全て土で埋まっていた。一年間とはいえ 1966 年にスガラン池が復元作業が行われ、新規の計画と方針を持って行われた復元作業は 1974 年に実施され、1984 年に終了した。スガラン池の機能はいまだはっきりしていないが、中国の歴史書や地域住民に伝わる話では、この池はレクリエーションと外国の賓客をもてなすために利用された。この貯水池は、375m 長で 175m の幅であり 2.88m 高の壁は 1.6m の厚さがあり約 6.5 ヘクタールの広さがある。入口は西側にあり、この貯水池はレンガが接着剤なしで積み上げられている。レンガ同士の密着にはお互いをすり合わせて平らになるようにしたものである。東南の部分には貯水池への水の引入れ口が、さらには南西には排水口が設けられている。この水路は南西にあるドラ(dowo)集落の養魚池と南にあるブンダル(budar)集落の養魚池とつながっている。現状からは導水と排水路と思われる。当初スガラン貯水池には貯水の機能を持たせていたと疑われる。この記念的構造物は環境との調和をはかったマジャパヒト王朝の能力を映しだす水工工作物技術の成果である。専門家によれば、この池はネガラクルタガタマ書での「湖」と言う言葉と同一と思われる。



南西の角から北を望む（同行の岡田聡さんからいただいた写真）

筆者註

現在、この池では魚の養殖が行われているようで、投網を持った村人たちが目に付く。

説明書では、レンガを擦りあわせて水が漏れないようにしているように見えるが、レンガの間には粘土を詰めて水密を保っているはずである。

この池の東側に王宮があるが、水上の催しを行うための水際に下りる階段が見つからないのが変である。

4.5 バジャン・ラトゥー門 Gapura Bajang Ratu S7 34'04.0" E112 23'55.5"

バジャンラトゥー門は行政区画ではモジョクルト県、トゥロウラン郡、トゥモン村、字クラトンに位置し、モジョクルトージョンバン街道から南へグリグック集落の交差点を東に 1.3km 進んだ地点にある。

この門は概観からその上に屋根を持つパドウラクサ(paduraksa)形式の門であることが判る。安山岩でできた入口の扉の敷居部分を含んだ階段の床部分以外の主部材はレンガである。平面的には 11.5m と 10.5m の四角をなし、高さ 16.5m、通り抜けの部分の幅は 1.40m である。垂直方向では、バジャンラトゥー門は脚と胴、屋根の三つの部分に分けられる。さらにこの門には二方向に向かって翼と塀がついている。門の脚の部分にはスリ・タンジュン(Sri Tanjung)の物語が描かれた panil の装飾が施されている。胴体の部分には蔓科の植物とともにサソリの装飾が施されている。一方、四角形の頂上を持ち層状に積み重なった形状の屋根になっている。この屋根には装飾が施されている。ライオンに挟まれたサソリの頭、太陽の浮き彫り、脚のある竜、ガルーダの頭部との浮き彫りと一つ目の巨人キュプロスの浮き彫りがある。これらの浮き彫りは危険を回避し神の加護を求める機能を有している。門の右側の翼に当たる部分には、巨人とサルとの戦をモチーフにしたラマヤナ物語の浮き彫りで飾られている狭い panil の形状をした塀でできている。扉の左右には耳が長い動物の彫刻がなされている。バジャンラトゥー門の名称は 1915 年の Oudheikunding Verslag (OV)に初出した。この門を調査した専門家の話では、バジャンラトゥー門は 1328 年のジャヤネガラ王の死去と関係があるとのことである。パラトン(Pararaton)書では「Sira ta dhinarmeng kapopongan, bhiseka ring Crnggapura pratista ring Antawolan」とジャヤネガラ王が 1328 年に死去したと言っている。クロム(Krom)によると、パラトン中のアンタウラン(Antawulan=現在のトゥロウラン)はナガラクルタガマ中のスリ・ランガプラ「Cri Ranggapura」と同一であり、一方パラトン中の・スルガプラ(Krom Crnggapura)はナガラクルタガマ中のアンタルサシ(Antarsasi)と同一である。それゆえ纏めると、ジャヤネガラ王のダルマ(聖所)は別名クルガプラあるいはクリランガプラというカポポガン(kapopongan)集落にある。聖なる建物プラティスタニヤ(Pratistanya)はアンタウランあるいはトゥロウランにある。このように、バジャンラトゥー門は、サカ暦 1328 年にウィシュヌ神としてこの世に再生するとナガラクルタガマ中で言われているジャヤネガラ王の死去を記念した聖なる建物に入る入口であると考えられている。この考え方はスリタンジュンの浮き彫りや輪廻からの解放の象徴を意味する門の翼の存在が支えている。

ラマヤナの浮き彫りや耳の長い動物の浮き彫り、竜の浮き彫りから見ると、この門の建設時期ははっきりしていないが、バジャンラトゥー門は 13 から 14 世紀のものであろうと思われる。1915 年にオランダ東イン

ド政府が行った硬化作業以外には建設当時からの門はいまだかつて復元されたことはなかった。1989 年に、バジャンラトゥー門の復元が始まり、1992 年にこの作業は終了した。



南側入口付近から



南から、手前の道路は修復時に付け足したもので、門の中心を通っていないのがさすがインドネシアである。

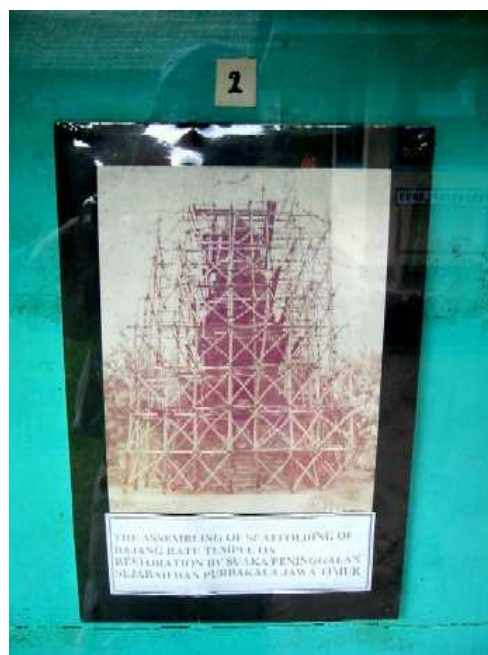


門の鴨居の部分の彫刻

現在でもバリで行われている彫刻と全く同じものであるカーラは広く東南アジアの遺跡に見られるものである。



1981 年の修復前の状態



修復工事中



レンガの積み上げ作業



1993 年の修復後の状態

筆者註

この門のガイドの話では、この門の左右には地表に残っている基礎の上に塀が続いていたが、近隣住民が取り外したのもあるとともに、修復作業の際に取りはずしたのもあるとのことであった。

この門から東側 20m に柵があり、その外まで塀はつながっていたが、私有地であったため塀はすべて撤去されてしまった。ただし、この公園になっている地域は古くから「マジャパヒトの土地」として近隣住民に知られていて、耕作地にはせずこの門の北側は墓地となっていたとのことであった。

また、結婚式などのお祝いには村人たちがこの公園に集まり幸福を祈るとのことである。

4.6 チャンディ・ティクス Candi Tikus S7 34'18.3" E112 24'12.7"

ティクス寺院(Candi Tikus)は行政区画ではモジョクルト県、トゥロウラン郡、トゥモン村、字ディヌクに位置し、バジャンラトゥー門から南東 500m の地点にある。

この寺院はモジョクルト県令であった R.A.A.クロモジョヨ・アディネゴロによって 1914 年に発見された。当時トゥノム(Tenom)地域とその周辺はねずみの害に襲われていて、駆除しようするとネズミ達は毎回きまってとある盛り土の上にある穴に逃げ込んでしまった。県令の命令でその穴を掘り進んでみるとその内部は建築物であったのがわかった。このティクス寺院は 1984 年から 1989 年にかけて復元された。全般的に見ると、地表から約 3.5m 下がった位置に作られたこの構造物は沐浴場の構造をしていることがわかった。それゆえ、床面まで降りるためには北側にある階段を使わざるを得ない。

構造物の平面は 22.5m x 22.5m の正方形で、全高は 5.20m である。主要構造物、テラスと池の構造材はレンガであり、マカラ(Makara=頭が野獣の形をした古代の彫刻)と紅白の蓮の彫刻が施された水の吹き出し口には安山岩が使われており、噴出し口のうち 19 個はトゥロウラン神像保護事務所に保管されているとは言え、この吹き出し口は 46 個存在する。吹き出し口以外には、導水路が主要構造物の裏側にあたる南側に、排水路は進入階段付近の北側の床上にある。主要部分は、8 本の塔がある第一テラスと 8 本の塔のがあり、その角は基礎の角と同じ向きにある第二テラスに囲まれた中心に位置している。

建築的視点から見ると、ティクス寺院は、マハメル山を中心とする宇宙の概念をモチーフにしたと想像される。同山の頂上には何体かのデワが鎮座していて、マハメル山から流れ出る水は聖なる水アムルタと理解できる。マハメル山が聖なる山であるという概念はヒンドゥー教と仏教ではよく知られており、ティクス寺院はヒンドゥー教と仏教徒によって聖なる場所とされた沐浴場である可能性が極めて高い。それゆえ、主要構造物はそれよりも小さい八つの峰で囲まれた主峰があるかのように形作られている、上部に行けば行くほど小さくなる構造物であるティクス寺院はマハメル山の複製あるいは象徴を構築している。



西側から見た全景



南西側から見る



修復前 1983 年当時の状態



修復作業中



1989 年当時の復旧前の状態



修復後水を張った状態



復旧前の状態



レンガの撤去作業中



レンガの積み立て作業中



修復後水を張った状態

筆者註

この遺跡が発見されたときには小高い丘の下に埋もれていたということであるから、マジャパヒトが滅亡した直後に火山の大噴火があったのかもしれない。ジャワ島の王朝の興亡は火山の噴火と大きな関係がある。

4.7 チャンディ・クダトン Candi Kedaton S7 34'12.8" E112 22 46.5"

クダトン寺院(Candi Kedaton)は行政区画ではモジョクルト県、トウロウラン郡、セントノレジョ村、字クダトンに位置し、プンドポアグン(マジャパヒト初代王が瞑想を行った場所)の南方約 500m の地点にある。

クダトン寺院は、スムール・ウパス(Sumur Upas)とも呼ばれており、この場所にあった穴(スムール)に昔入ろうとした人があり、ある程度入ったところで体がだるくなった。それゆえ後日この穴は毒の穴(スムール・ウパス)という名で知られた。この穴は現在大きな石の板でふさがれている。

この地点にはいくつかの構造物が存在する。主要構造物はひとつの構造物の基礎部分にあたる入口前の北東部にあり、12.6m x 9.5m の長方形で 1.58m の高さがあり、でたらめな積み方のレンガで構築されている。この建物の前に、85cm x 85cm の正方形をなすレンガで作られた古い井戸がある。この地点での他の建物は主要構造物の南に隣接している。この場所は以前、毒の穴と通路がその上にある土の山であった。この遺跡の発掘後、互いに積み上げられた構造をもつ形状であることがわかった。この構造と上部構造物の基礎から見ると、このクダトン寺院は居住用に作られた建物であると考えられる。この地点で発見された遺物には陶器の破片と素焼きの神像、安山岩製の神像、外国製の磁器、古銭、金製品、人骨がある。

発見されたものの大部分が中国製の外国産磁器、14-17 世紀の明の時代と 13 から 14 世紀の元の時代のものである。これらの遺物の分析の結果、クダトン寺院はたぶん少なくともその同時期である 13 から 14 世紀に建設されたものと思われる。

クダトン寺院群から 200m 西方には、かなり大規模な礎石からなる考古遺跡が 20 箇所あり、それらは東西方向に平行に並んでいる。



保護中で発掘作業はぼちぼち

	
北西側から見た状態	西側から見た状態
	
レンガ積み作業中	復旧後の状態

筆者註

このクダトン寺院は、最後のマジャパヒト王が消滅した場所とも言われている。現地の管理人の話によると、下の写真で石の板でふさがれている穴から王族一族が地下のトンネルを通して逃亡した。そのトンネルの一端はラウ山のチャンディ・チェト寺院に、もう一つは南海岸に、さらにはバリにまでつながっている、という奇想天外のことである。この穴にはマジャパヒト王が用いた呪術という武器が隠されているとのことである。翌々日チャンディ・チェトで聞いたところ、トゥロウランとトンネルでつながっているという話はなかった。

ジャワ暦の決まった日の夜には現世利益を求める人たちがこの石の上で瞑想を行うという相当に胡散臭い穴である。

この遺跡には玉石を敷き詰めた通路と思しき構造物があり、その表面は地表下約 1.5m である。

この遺跡の構内(案内板の近く)にある古い井戸の水はそのままでも飲めるとのことです。車でつるべくみ上げてもらい、いただいてきた。軟水である。下痢はしなかったのでも普通の日本人でも大丈夫だろう。井戸の水位は地表面から約 5m であった。勇気ある方は霊験あらたかな井戸水を！



4.8 トウロロヨ墓地 Makam Troloyo

セントノレジョ地点は行政区画ではモジョクルト県、トウロウラン郡、セントノレジョ村、字シドダディに位置し、クダトン寺院群から約 750m 南方の地点にある。

墓地と tralaya に関して最初に発表したのは 1878 年に発行された JAVA Jilid II という本の中で、P.K. Veth であった。Veth は、tralaya 墓はアラビア文字の碑文があるといっている。Tralaya 墓に興味を抱いた他の専門家達には Verbeek, Knebel, N.J.Krom などがある。トロロヨの最新の調査は L. CH Damais が行ったものである。墓標の文字の解読以外に、彼もマジャパヒトとの関係をさがそうと研究を行った。

トウロロヨ墓地群は三つの主要な墓地群から構成されている。そのひとつはワリソゴ(Wali Songo)のグループであり、二つ目はシェク・ジャエラニ・クブロ(Syech Jaelani Qubroh)、三つ目は七墓である。墓標の外面に記載された碑文は通常アラビア文字でトイバア(Thoyibah=「アッラーの他には神はない」の意味)の文章が盛り込まれている。トウロロヨで興味を引かれるのは脱落している文字が碑文に存在する点である。さらに、描かれた文字の書き方にも不自然な点がある。墓標の頭部の中はマジャパヒトの太陽の浮き彫りで装飾されていて、このマジャパヒトの太陽には、雲の周りに放射状に出ている先がとがったロンタール(lontar=昔文字を書いたやしの葉)と呼ばれる装飾がある。トウロロヨ墓地群にある数十基の墓標からは、ひとつとしてその墓に埋葬された故人の名前がないが、ひとつだけ小さな破損状態がひどい墓標には「Zain 没年 874H」と思われる名前が書かれているように思われる。この石碑はアラビア語を用いアラビア文字で書かれている。他の墓石の碑文は主に「KULU NAFSIN ZAIQATUL MAWTI FAINNAMA UJURAKUM YAWMAL QIYAMATI」(命を持つものはすべて死を感じ、最後の審判のあと神の意思は完成する)とかかれたものである。得られたデータから、記載されているのは 1376-1611 年のヒンドゥー時代からの装飾の柄、混乱を招くアラビア文字の記述と墓標の大部分は埋葬者の氏名が書かれていないこと、その他には、死と「アッラーの他には神はない」というムスリムたちにリマインドさせる意味を含んだクルアンの聖句がある。なぜなら、トウロロヨ墓地はマジャパヒトの王都の中にあり、専門家たちは、トウロロヨに埋葬された人たちはイスラム化したマジャパヒト王家の人たちであり、イスラムの伝播が 1376 年以前にジャワの内部に入り込んでいたとまとめている。

筆者註

墓標に脱字があることからみるとイスラムの到来間もない頃の墓地なのであろう。

トウロウラン博物館長のアリス氏の話によると、マジャパヒト王朝が滅びた後、イスラムがまだ浸透していなかった地方では、元の原始信仰に戻ってしまったとのことだった。それゆえ、ポリネシア風の彫像が見られるとのことである。

4.9 ブレ・カフリパンのヨニ Yoni Bhre Kahuripan S7 30'55.3" E112 23'46.6"

ブレ・カフリパン(カフリパン女王の墓所)のヨニはブラフ寺院から東北約 4km の地点にある。

トゥロウラン地域の遺跡に関する記事に記したように、この地点も遺跡周辺に建物を建てたりする住民によって汚損されている。この遺跡はパティ・ウダラ(Patih Udara)という名で知られる人によって祀られている。観光対象はヨニと神像か石碑を作ろうとした大きな転石である。

ヨニは、男性の象徴であるリンガの台となっている女性の象徴である。

ヨニには、パラトンによればハヤムウルク王の生母である現在のモジョクルト県トゥロウラン郡に含まれるパンギー(Pangih)地域に埋葬されたトゥリブアナ・トゥンガデウィ、別名ブレ・カフリパンがの亡くなった年、サカ暦 1294 年(1372 年)の数字が刻まれている。

ブレカフリパンの墓所



墓所入り口



墓石全景(2007-01-31)

墓所内部にはこのような破壊された像があった。よくよくみると線刻の痕がわずかに残っている。この付近は狂信的なイスラム教徒が多く、それに破壊されたものであろう。



女王の侍女と墓所とされる建物

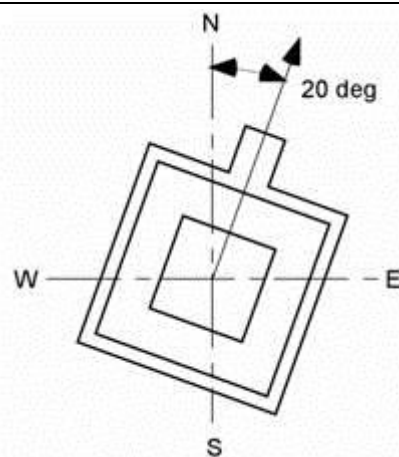
入り口には Petilasan Sabdopalon Noyogenggang と書いてある。



墓所の内部

参拝者がまだあると見えてお線香たてがあった

ブレ・カフリパンのヨニ これらは女性器を意味するヨニである。

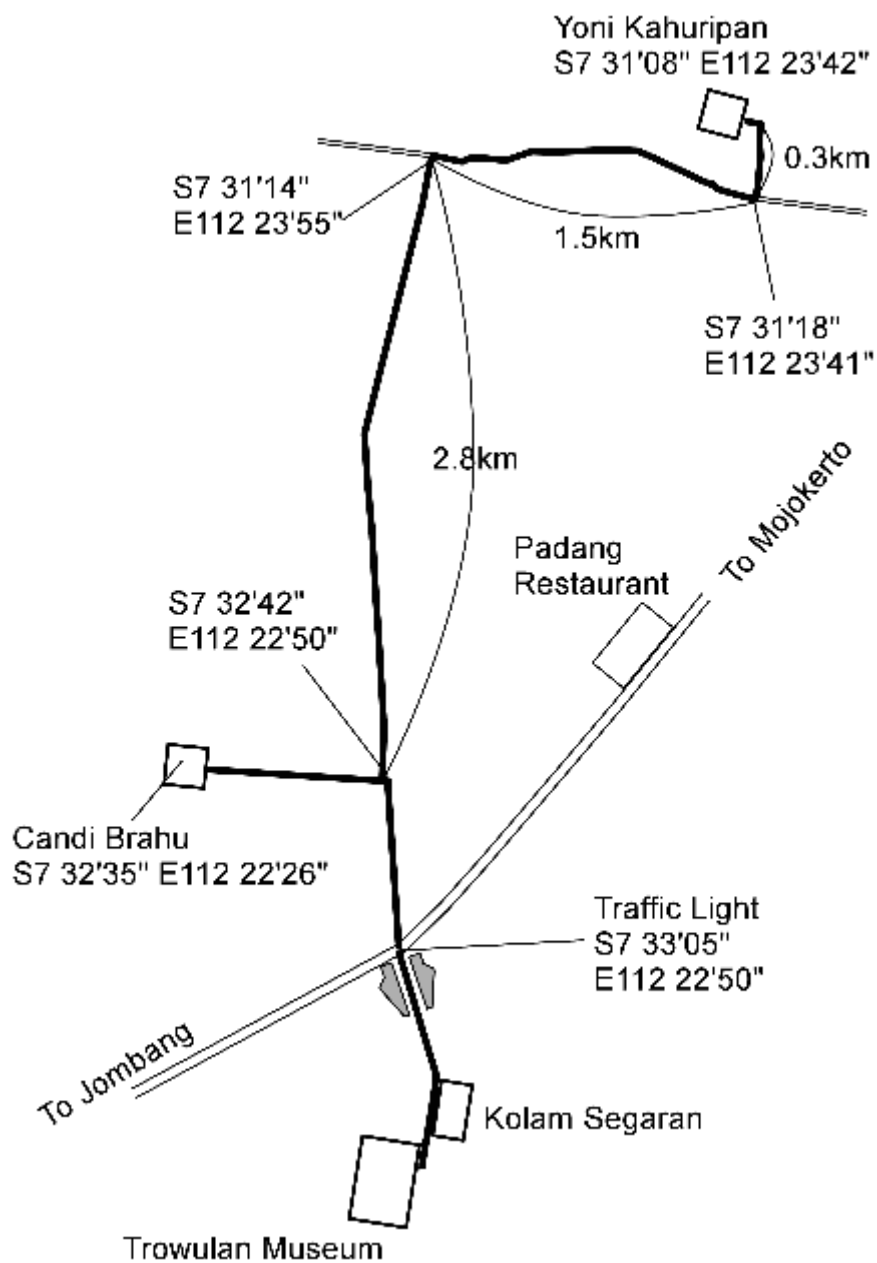


ヨニとリングとは実はアヌナキが人間を作った時の記念なのか。あるいは、農産物から油をとるための压榨機ではなかったのか。

遺跡の紹介図(現状とずいぶん違うところがインドネシアなのである)



モジョパヒト王朝の王様の系図



Location Map of Yoni Kahuripan

4.10 チャンパ姫墓地 Makam Putri Campa S7 33'20.5" E112 23'05.7"

この墓地はスガラン池からそう遠くない場所にあり、地域住民が祀っているこの墓は縁日、特に金曜日のレギの前の晩、にはトロウラン以外からも沢山の参詣者がある。

サカ暦 1203 は菩提樹を植えた事件があった。



円柱の手前に見える穴がこの菩提樹が植わっていた場所である。この菩提樹は数十年前に枯れてしまった。

遺跡の説明書にはこの事件が何であったかかかれていなかった。一般的に言う「菩提樹を植える」ということは何かの悲劇が起こったことを意味している。

ウェブサイトで探索した結果、この年にベトナムにあったチャンパ王国が蒙古の軍隊に占領されたことがわかった。チャンパとジャワは別なページに記したように海のシルクロードで深いつながりがあった。それゆえこの元寇で大量のチャンパ人がジャワに避難民として流れ込んだのだらうと思われる。避難民のほとんどは王朝の貴族たちとその従者たちであり、その中には技術者も含まれていたはずである。この技術者たちが祖国チャンパの建築様式とジャワ固有の建築様式を混ぜて、トロウランのチャンディなどを建設したと思われる。

チャンパの姫の名は民間伝承に現れる名前であり、ジャワ古代数字で書かれたサカ暦 1370 年(1443)の数字が入った墓石は遺跡の価値の対象となっている。墓標は主墓と第二庭の二箇所に分かれ、主墓のものは高 62cm、幅 32cm、厚 13cm であり、もうひとつは高 32cm、幅 22cm、厚 11cm である。この墓所はおそらくはイスラムに改宗したマジャパヒト王家の一族のものと思われる。



墓所の入り口の門。ジャワ風ではなく、アラブ風でも中国風でもない独特のスタイルである。



入り口の門から入ったところにある内門。



チャンパ姫墓所からみた最も奥の門。



手前がウィジャヤ III のお妃、奥がチャンパ姫の墓



同じ墓所を反対側からみたところ



チャンパ姫についてきたという従者の墓



この墓所の管理人。写真はお断りといったが隙を見てパチリ

左の写真の女性は、代々この墓所を守っている人の奥さんである。

どういうわけか、旦那さんではなくてこの夫人が墓所を守る運命にあるとご本人が言っていた。

ごらんのように「鄙にはまれなる」容貌を備えているので、チャンパ人の末裔ではなかろうか。

ちなみにこのサイトの筆者は「外人離れ」した容貌の持ち主である。

このときもいつものとおり、墓所で故チャンパ姫に話しかけたところ、彼女はベトナムの生まれではなくジャワで生まれたといていた。管理人さんの話では故人はベトナム生まれだとのことだった。まぶたに現れたチャンパ姫の面影は気品を備えたかなり高齢の女性であった。

最初に故人とコンタクトを取ろうとしたときに現れたのは、おかしなことに隣に埋葬されているウイジャヤ三世のお妃であった。この方は40代と思われるふっくらした色白の美人で、「チャンパ姫に話しかけるなら反対側に回りなさい」というメッセージが届いた。そういえばこのお妃のお墓を飛び越してチャンパ姫に話しかけていたのであった。

写真を見てわかるように、この墓地は全てイスラム式で埋葬されていて墓標にはジャワ文字で何かが記されている。マジャパヒトといえばヒンドゥー教と深い関係があるが、その初期からイスラムが伝播していたことがこの墓地から見て取れる。ジャワでのイスラム布教に力を貸したのは皮肉にも蒙古人であったのである。

4.11 長い墓地 Kubur Panjang

この歴史遺産は、モジョクルト県、トゥロウラン郡、トゥロウラン村 字ウンガウガハンに位置し、チャンパ姫墓所から遠くない場所にある

この墓地の古さは、特に金曜日のレギの前の晩に民衆が頻繁に参詣する他の墓所のような墓地である。墓石にはサカ暦 1203 年(1281)の数字がみられる。1900 年頃に発見した J. Knebel によると磨いた石で作られている。この石は長 50cm、幅 35cm、厚 10cm である。墓石に古代ジャワ文字で示された「Pangadegning Bodhii 1203」(サカ暦 1203 年に菩提樹を植えた事件があった)という記事を示している。

筆者註

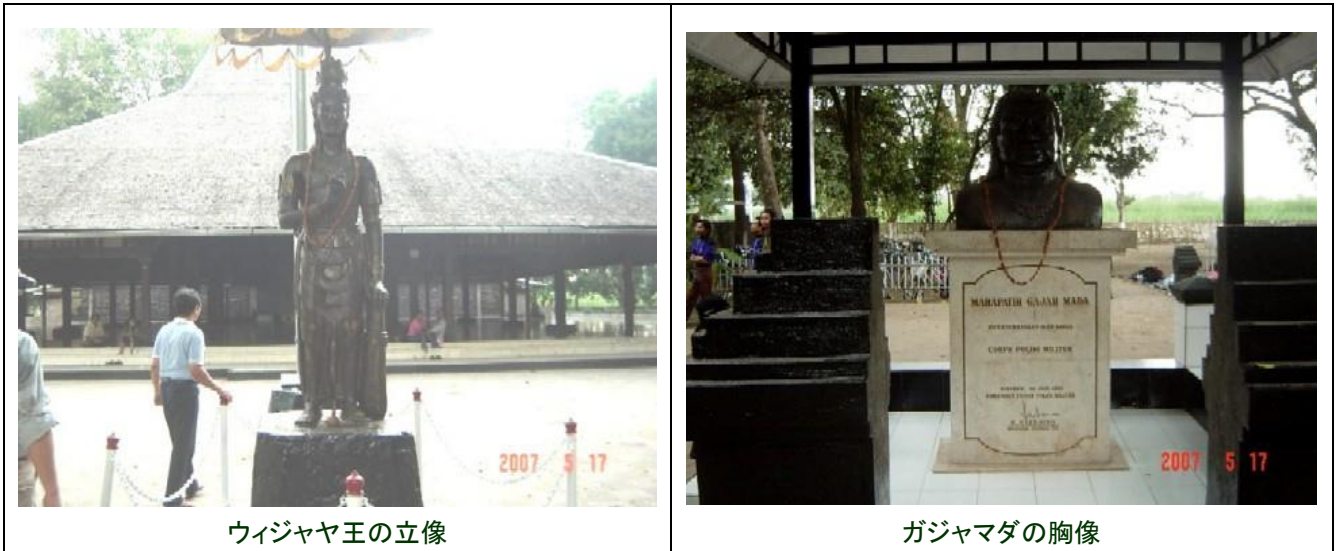
今回 訪問しなかったので写真はありません。あしからず。

4.12 プンドポ・アグン Pendopo Agung S7 33'59" E112 22'48"

この項目はパンフレットになかったので、知己などに尋ねて起こしたものである。

博物館から南に下る道を約 1km 進んだ地点の右側にある。

マジャパヒト初代のウィジャヤ王がこの地で瞑想を行い、王国を建設したとのことである。この地には特に目立つ遺構はなく、考古学の範囲からは外れているが、陸軍東ジャワのブラウィジャヤ師団がこの地に大型の吹き抜けの建物を立て、名所巡りの旅のためのひとつの観光地となっている。



ウィジャヤ王の立像

ガジャマダの胸像

同行の岡田聡さん提供の写真

筆者註

これは遺跡ではないが、近くを通りかかったのでちょっと雨宿りしてきたもの。駐車料金を踏み倒してきてしまったのだ

4.12 市場と壁跡 Pasar & Wall S7 33'55.3" E112 22'57.4"

2007-11-01 にトロウラン博物館を訪ねたのは閉館直後であり、館長以下全職員が帰宅したばかりであった。どうしても館長にお会いしたく守衛さんに自宅まで案内してもらった。

館長さんとの談笑の間、二週間前に新しく遺跡が見つかったので、正確な位置を計測して欲しいという依頼があり、その足で新しい遺跡を尋ねた。

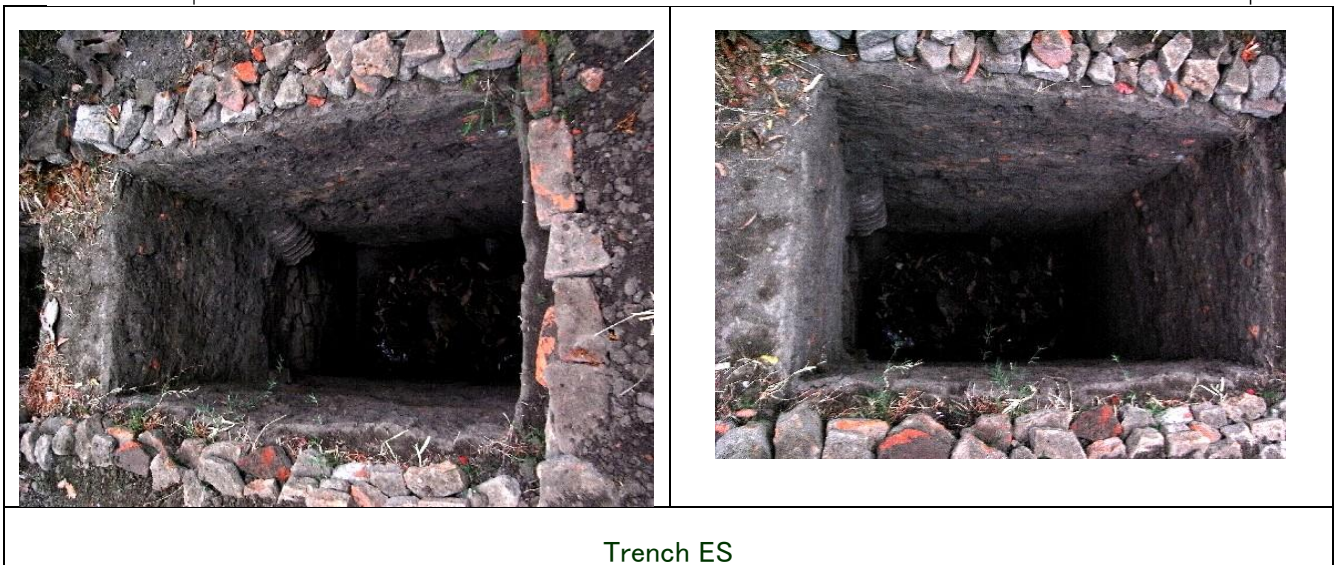
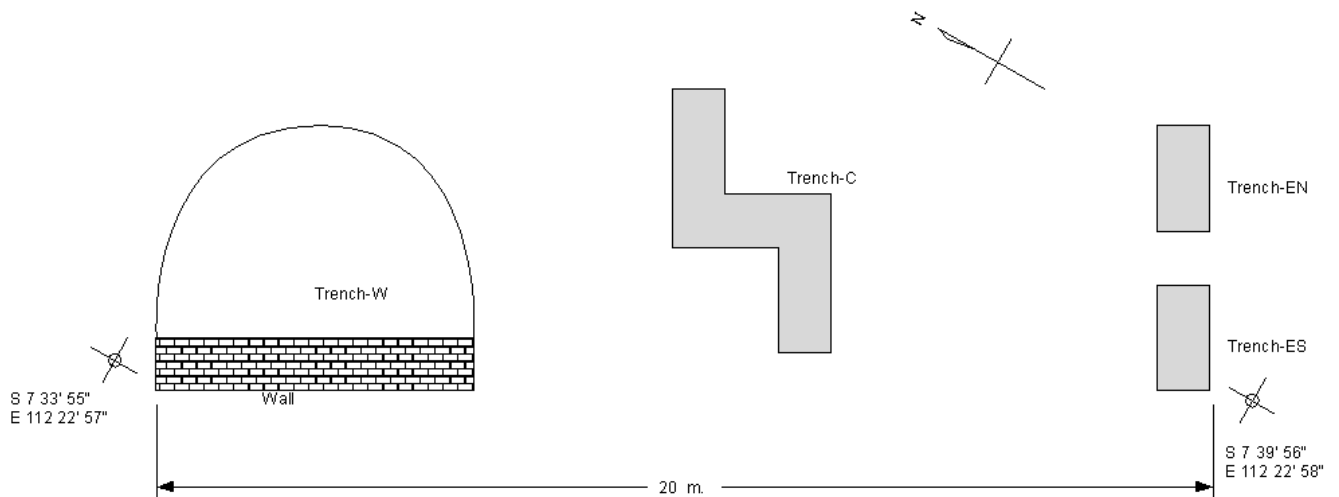
このウェブサイトでこの遺跡を初めて公表させてもらえるのは光栄な限りである。

盗掘を防ぐためにこのページは当分日本語だけにしておくつもりである。

発掘は下図のように隣接する三箇所で行われており、深さ約 3m のトレンチが掘られていた。夕方で光量が足りないため解像度が低い上にぶれているのをご容赦ください。

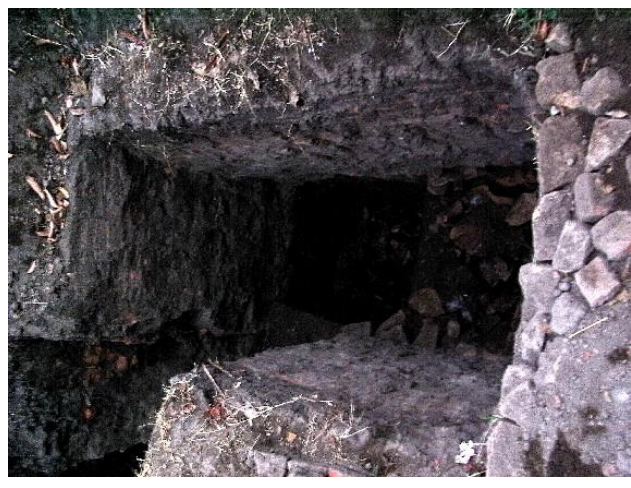
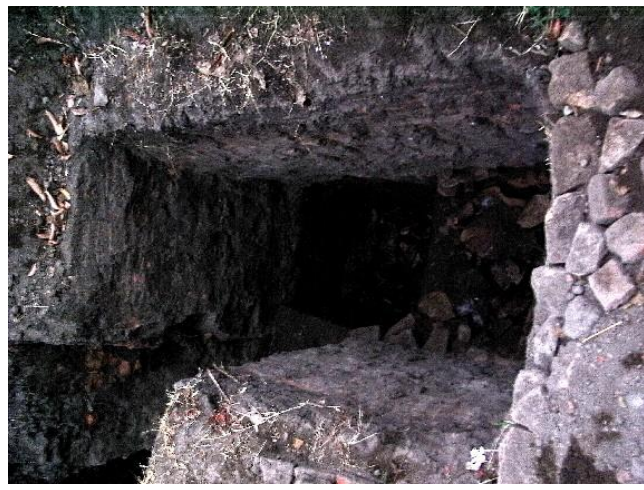
SKETCH OF LOCATION FOR NEWLY FOUND WALL AT TROWULAN

Prepared by Omdoyok
Nov-03-2007





Trench EN



Trench C



Trench W

レンガの厚い壁が Trench W に最もきれいに見える。

この壁は厚さから見て、トロウランの外壁をなして、この場所はヌガラクルタガマの記述内容からみると市場ではなかったかと思われる、と館長のアリスさんは言っていた。

いずれにせよ、発掘の結果が待たれる次第である。

事実この外壁遺構の西側の土地には小学校が建っており、外壁の中心線を延ばした先は校舎のすぐそばを通るため、建物を移さなければならないかもしれない、とのことであった。

この地域は農業地域ではあるが、人口増加に伴う住宅の増加で、発掘には立ち退きなどが必要になってくるのでできるだけ早く発掘を行わなくてはならない。

この遺構を発見して報告したのはこの土地を耕していた農民で、奥さんにはいつも「遺物が出たら博物館に連絡するのだ」と言っていた、という。

このトレンチもこの農民が自分で掘ったものであるとのことであった。この功績でこの農民は発掘のための臨時職員として雇われることになったとのことである。

館長のアリス氏の話では、トロウラン遺跡は数メートルの火山灰に埋まっていたので、多数の遺跡が残っているとのことであった。この遺跡の南部にはアルジュノ、カウイなどの火山がたくさんあるが歴史に名前

を残すような大噴火の記録はない。小噴火を繰り返してこの遺跡が埋没してしまったのだろう。さらにこの遺跡を作った人たちの大多数は火山灰に埋もれた土地を離れてしまい、その後数百年してから別な土地から別な人たちが移住してきたのであろう。それゆえに遺跡の保護にはあまり熱心ではなかったのだろうか。

2014-11-12 PDF 化